

総論編

この戦略からはじまるなごやの生物多様性

「むか～しむかし、瀬戸からなごやをとおり知多半島にいたる丘陵地には、連続した緑豊かな森がありました。」

こんな想像をしてみてください。もし、今でも、その森が残っていたら？

「ごんぎつね」は、ふるさと半田から「モリゾーとキッコロ」に会いに海上の森まで旅をしたのではないのでしょうか？

そして、緑豊かな東山公園に、あるいは水辺の環境豊かな天白川に、ちょっと立ち寄ったかもしれません。

少し前の時代まで、なごやを含めたその周辺には、“豊かな自然(多様な自然)”が残っていました。便利で快適な暮らしを手に入れたことと引きかえに、わたしたちはそれらを失ってしまったのです。

このままでは、今度はわたしたちが“暮らし”を失うことになります。そのようなことにならないように、未来につづく持続可能な自然と暮らしをつくるために、わたしたちの取り組むべき方針を示したのが「生物多様性2050なごや戦略」です。

(1) 生物多様性2050なごや戦略で伝えたいこと

生物多様性とは、生きものや生態系の豊かさを表す言葉ですが、その生きものを育む大地を創りあげた長い歴史や、人の暮らしと深く結びついています。

生物多様性に目を向けることは、まちのあり方や地域のあり方、そして私たちの生活そのものを見つめ直すことともいえます。

なごやにとっての生物多様性について、わたしたち自身が考えなくてはいけないのです。

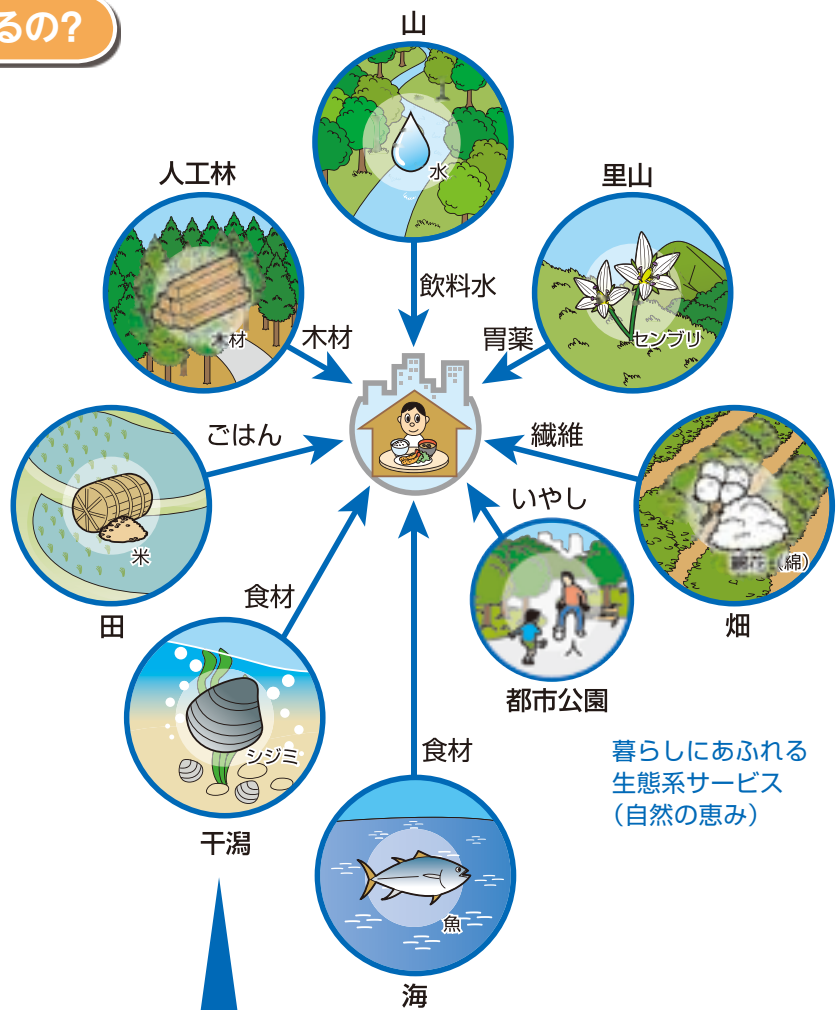
なぜ、生物多様性を保全するの？

わたしたちは、さまざまな生きものに支えられています

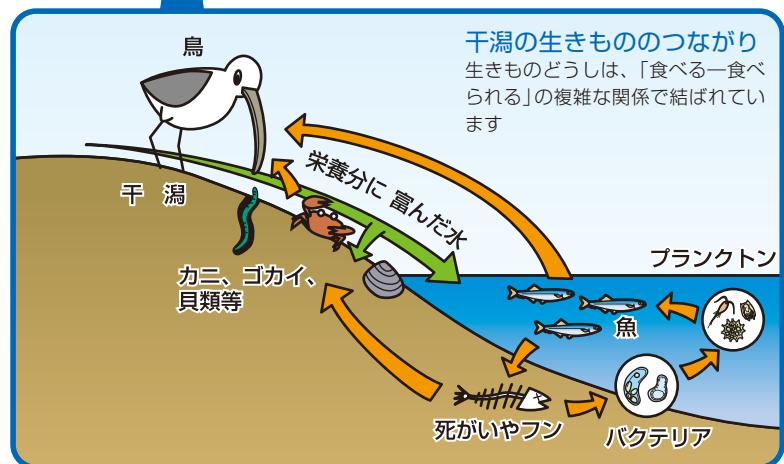
- わたしたちは、生きるために、食べものだけではなく衣服や住まいの材料、薬の原料など、多くのものを自然の中からもらっています。
- たとえば、山に降った雨は川によって運ばれ、わたしたちが毎日利用する水になります。
- また、自然とのふれあいの場や、自然の中で感じるいやしの効果など、自然そのものからもさまざまな形で支えられています。

生きものは、互いにつながりをもって生きています

- すべての生きものは、互いにつながりや役割をもって生きています。
- つながりが切れてしまうと、他の生きものが困ってしまうだけでなく、わたしたちの食べものがとれなくなるなど、安心した暮らしができなくなってしまうかもしれません。



暮らしにあふれる生態系サービス (自然の恵み)



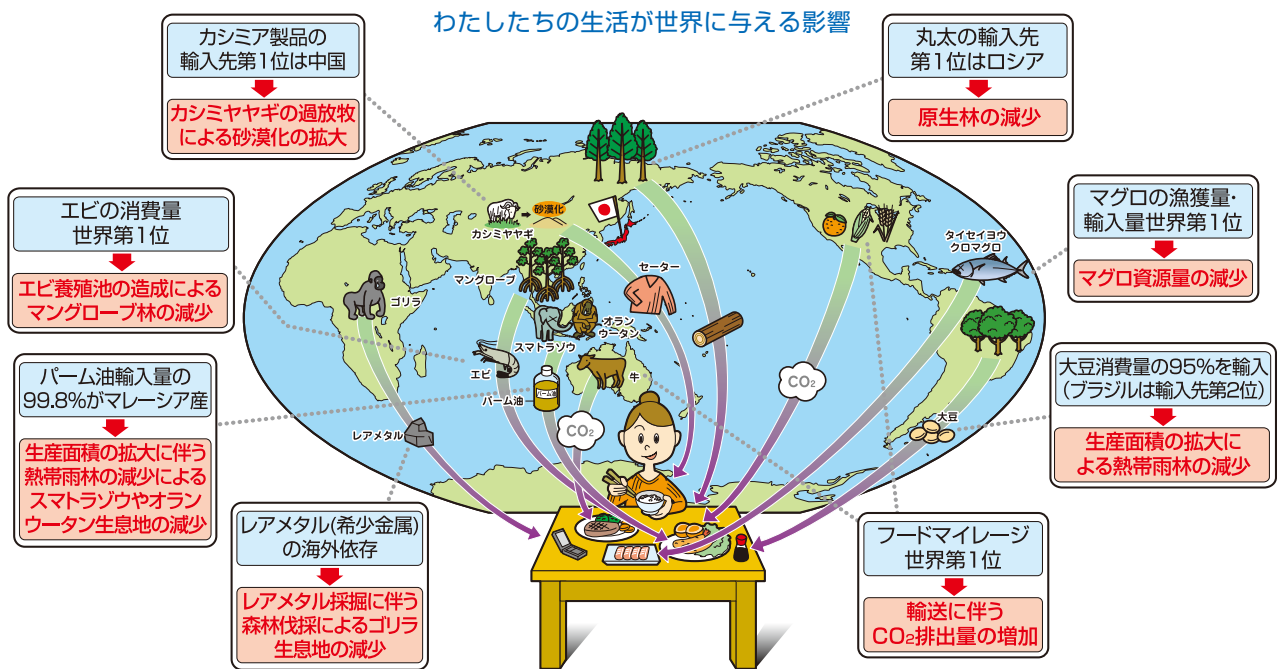
干潟の生きものをつなぐ生きものどうしは、「食べる-食べられる」の複雑な関係で結ばれています

～多様な生物と生態系に支えられた 豊かな暮らしが持続していく都市なごや～

大都市なごやにも関係があるの？

わたしたちは、世界中の生物多様性に依存し、影響を与えています

- 現在、わたしたちは、外国から輸入される食品やエネルギー、つまり世界の生きものに多くを依存しています。
- 毎日の食事や衣服、家具など身の回りにあるものはどこから来ているのでしょうか。
- 外国の資源をわたしたちが大量に利用することによって、その地域の生物多様性だけでなく、地域の人々の生活にも影響を与えています。



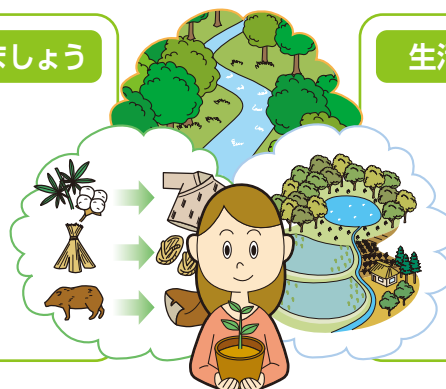
備考：データは日本全体のものです。

フードマイレージとは、食べ物を遠くから運ぶことの影響を示す値で、「食べ物の重さ × 運ばれてきた距離(t・km)」で示されます。

なごやの生物多様性をまもり、 世界中の自然の恵みを持続可能な方法で利用する こうしたわたしたちの行動が必要です

身近な自然を保全・再生しましょう

- まずは、あしもの“わずかに残るなごやの自然”にしっかり目を向け、大切にしましょう。
- 身近な自然を大切に、世界の生態系の保全につなげていきましょう。



生活スタイルを転換しましょう

- 現在のようにたくさんの“モノ”を消費する生活を見直していきましょう。
- 古来からの知恵や文化を活かして、自分たちの力で暮らしを支えていきましょう。

(2) 戦略策定の背景と手法

生物多様性をめぐる世界と日本、なごやの動き

- 1992年開催の「地球サミット」において「生物多様性条約」が採択され、生物全般の保全に関する国際的な取り決めができました。日本は1993年にこの条約を締結しました。
- 1995年には国家戦略が策定され、生物多様性に関する制度が整えられてきました。
- 2010年、COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)がなごやで開催されます。それに先立ち、なごやではこの戦略を策定しました。

年	世界	日本	なごや
1992	地球サミット(ブラジル・リオデジャネイロ) 「生物多様性条約」採択  「どうやって直すかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。」 (12歳の少女、セヴァン・スズキのスピーチ) 写真提供：ナマケモノ倶楽部	生物多様性条約署名 「種の保存法」制定	
1993	生物多様性条約発効	生物多様性条約締結	
1995		「生物多様性国家戦略」策定	
1996			「環境基本条例」制定 ◆前文に『人と自然が共生することができる健全で恵み豊かな環境を保全』を掲げる
1999	ExCOP1(コロンビア・カルタヘナ) 「カルタヘナ議定書」討議 ◆遺伝子組換え生物の国境を越える移動について規制の必要性を決議		「藤前干潟最終処分場建設計画」断念 ◆全国的な環境意識の高まり  守られた藤前干潟 「環境基本計画」策定 ◆「環境首都なごや」の実現へ
2000	カルタヘナ議定書採択		
2002	COP6(オランダ・ハーグ) 「2010年目標」採択 ◆「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させること」を目標	「自然再生推進法」制定 「(第二次)生物多様性国家戦略」策定	藤前干潟「ラムサール条約」登録
2003		カルタヘナ議定書締結	
2004		「外来生物法」制定	
2005	国連「ミレニアム生態系評価(MA)」発表		「愛・地球博」開催 ◆市民の環境意識の高まり
2006	COP8(ブラジル・クリチバ) 「生物多様性保全における企業の役割の重要性」を指摘		「(第二次)環境基本計画」策定 ◆「人と自然が共生する快適な都市」を明記
2007		「(第三次)生物多様性国家戦略」策定	
2008	COP9(ドイツ・ボン) 「COP10開催地なごや」決定  COP10なごや決定時の関係者たち	「生物多様性基本法」制定	
2010	COP10(日本・なごや)		「生物多様性2050なごや戦略」策定

COP : Conference of the Parties (締約国会議)

ExCOP : Extraordinary Meeting of the Conference of the Parties (特別締約国会議)

ラムサール条約 : 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約

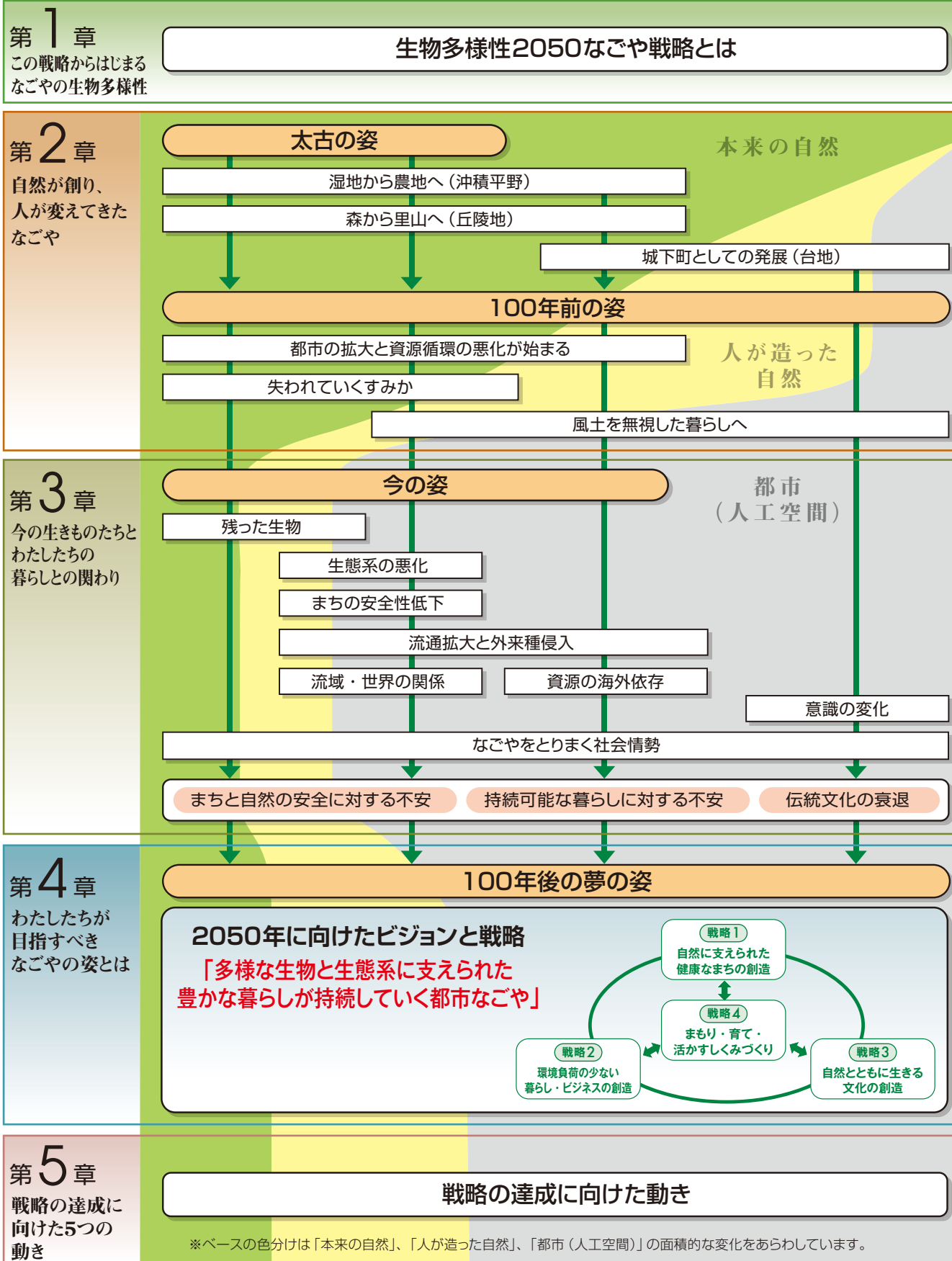
生物多様性なごや戦略策定会議

- この戦略は、「戦略策定会議」を通じ、市民との協働によって策定しました。
- 「戦略策定会議」は、専門家や生物多様性アドバイザー、なごや環境大学のメンバー、NPOや地域の市民有志などで構成しました。



(3) 戦略の全体構成

「生物多様性2050なごや戦略」の構成を、以下の図に示しました。



「生物多様性2050なごや戦略」では、なごやの歴史を振り返り(2章)、現状を把握しながら(3章)、将来のビジョンとその実現に向けた戦略を示し(4章)、すでに始まっている取り組みを紹介し(5章)。

総論編

- (1) 生物多様性2050なごや戦略で伝えたいこと
- (2) 戦略策定の背景と手法
- (3) 戦略の全体構成

歴史編

- (1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

- ・隆起と浸食と堆積が3つの地形を創った
- ・地形や気候からなごやの自然環境の基盤が築かれる
- ・地形と水が生きものを育む

- (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

- ・総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり
- ・湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された
- ・森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された
- ・台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた
- ・100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた

- (3) 近代都市なごやの発展

- ・都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり
- ・自然の摂理を超えた市街化により、失われていくすみか
- ・資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ

現状編

- (1) 身近な隣人——なごやの生きものたち

- ・今も残るすみかには、まだ生きものたちが暮らしている
- ・今の3つの地形で、生きものたちはどうやって暮らしているのか
- ・今も残るすみかは、流域や世界ともつながっている

- (2) 快適な人の暮らしと生きもの

- ・人に都合のいいまちのつくりは、生きものにとって暮らしにくい
- ・生物多様性に守られているわたしたちの暮らし
- ・流通網の拡大が、本来そこにいないはずの生きものを運ぶ
- ・地域のつながりを見直す
- ・世界の生物多様性に影響を与えているわたしたちの暮らし

- (3) 生きものからいただく豊かな心

- ・生きものから感じる心の豊かさを失っていませんか？

- (4) 社会情勢の変化のきざし

- ・21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています

展望編

- (1) しみが描いた100年後の夢のなごやの姿

- ・みんなで描こう! 100年後の夢のなごや

- (2) 2050年に向けたビジョンと戦略

- ・「環境の世紀」の折り返しにあたる2050年に向けた戦略を立てました

実践編

- (1) 健康なまちづくりにつながる動き
- (2) 暮らしやビジネスの変化につながる動き
- (3) 新しい担い手や地域づくりにつながる動き
- (4) しきみづくりにつながる動き
- (5) 横断的な取り組みに向けて

コラム 生物多様性

生物多様性とは、生きものや生態系の豊かさを表す言葉です。

地球上には、森、里、川、海など様々なタイプの自然があり、その中に3,000万種ともいわれる多様な個性をもつ生きものがいます。

生きものは、お互いにつながりあい、支えあって生きています。わたしたち人間もそのつながりの一部です。

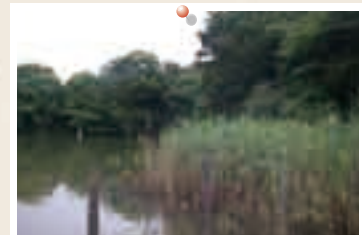
3つの生物多様性

生態系の多様性

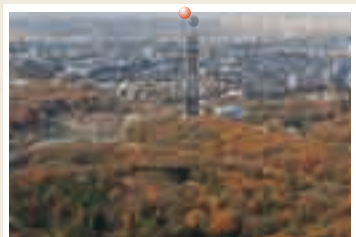
大都市なごやにも、樹林やため池、農地、河川、干潟など様々な生態系があります。



南陽町の水田地域(港区)



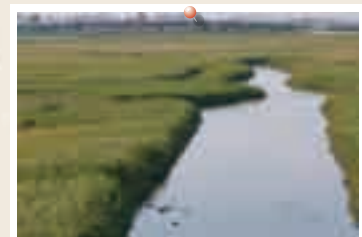
八竜新池(守山区)



東山丘陵の樹林(名東区)



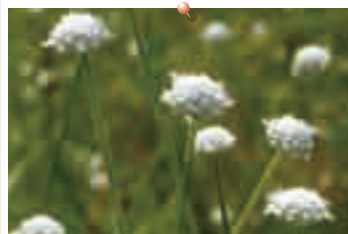
藤前干潟(港区)



庄内川のヨシ原(港区)

種の多様性

様々な種類の生きものによって、なごやの生態系が支えられています。



シラタマホシクサ

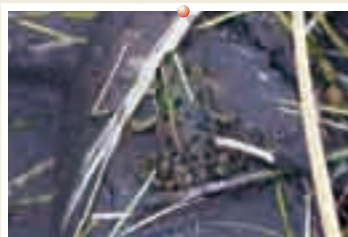


ヒメタイコウチ

シラタマホシクサやヒメタイコウチは、なごや周辺にしか分布しない種です。

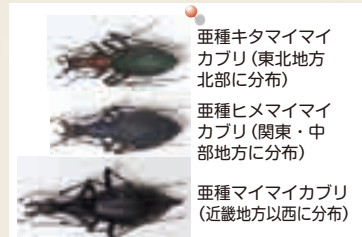
遺伝子の多様性

同じ種類でも、地域によって形態や行動などの特徴が少しずつ違います。



ナゴヤダルマガエル

近畿から東海に分布する名古屋種族と瀬戸内に分布する岡山種族で鳴き声が異なります。



亜種キタマイマイカブリ(東北地方北部に分布)

亜種ヒメマイマイカブリ(関東・中部地方に分布)

亜種マイマイカブリ(近畿地方以西に分布)

マイマイカブリ

日本に広く分布しますが、地域的に形態が異なります。

それぞれの地域で、その土地の歴史につちかわれた多様性やその場所に特有の生物の種・個性・生態系を大切にすることが、生物多様性の維持につながります。

コラム 生物多様性の恵み（生態系サービス）

わたしたちは、食糧や燃料の供給をはじめ、様々なかたちで生物多様性がもたらす恵みに依存しています。こうした恵みを、生態系サービスと呼んでいます。

わたしたちが日々あたりまえと思っていることがら、たとえば空気や水の浄化、気候や洪水の調節などの多くが、生態系サービスの上に成り立っています。

4つの生態系サービス

供給
サービス

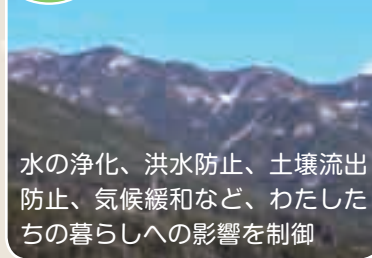
暮らしの基礎



食糧・燃料・木材・繊維・薬品・水など、わたしたちの生活に重要な資源を供給

調整
サービス

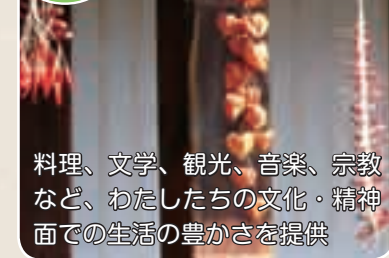
自然に守られる
わたしたちの暮らし



水の浄化、洪水防止、土壌流出防止、気候緩和など、わたしたちの暮らしへの影響を制御

文化的
サービス

生きものと文化の
多様性



料理、文学、観光、音楽、宗教など、わたしたちの文化・精神面での生活の豊かさを提供

基盤
サービス

生きものが支える大気・水・土壌



生態系サービスの土台
わたしたち人間を含むすべての生命の
生存基盤である地球環境を形成・維持



わたしたちの生活、社会、経済

安全

衣食住を支える資源供給

健康

良好な社会関係

選択と行動の自由

